唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 24

スクラップにされた銅鐸

●コレクション・データ

時　代　弥生時代　中期
調　査　唐古・鍵遺跡　第77次調査
発見年　2000年
大きさ　高さ7.1㎝・幅6.0㎝・厚さ0.9㎝
展示位置　第2室「青銅器をつくる」

弥生時代の祭器の一つ、銅鐸。これがどのように使われ、埋納されたかは、弥生時代の謎です。大半の銅鐸は、完全な形で埋納されていますが、破砕されたり、装身具として再加工されたりした銅鐸片もいくつか知られています。銅鐸がどのように最後を迎えたかを知ることは、謎を解く一つの鍵になるでしょう。

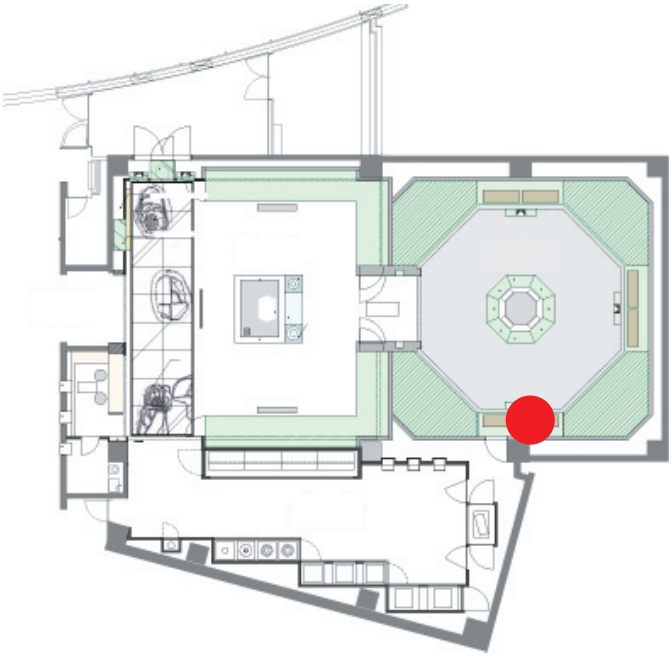
今回紹介する銅鐸は、唐古・鍵遺跡第77次調査で出土したもので、完全な形でなく6㌢×7㌢ほどの小さなかけらです。銅鐸は、吊り下げる部分の「鈕」と内側から叩いて音を共鳴させる本体部分「身」、「身」の側辺の装飾部分「鰭」で構成されています。

今回の銅鐸片は、湾曲や文様から「身」の中央やや下側の破片で、外面に斜格文を充填した横帯と縦帯がある四区袈裟襷文銅鐸と判断されます。復元すれば高さ40㌢ほどの大きさになります。また、この区画内には、0・5㌢×0・6㌢の横長の楕円形の突線が一部残っており、意匠不明の絵画と考えられます。

この銅鐸片の最大の特徴は、厚みが約0・9㌢もあることです。一般的に銅鐸の厚みは0・3㌢ほどですから、この銅鐸片は厚すぎます。また、銅鐸片の下辺は割れ面でなく、熔けた青銅がそのまま固まり丸くなった状態を示しています。このことから、この銅鐸片は、鋳造に失敗しスクラップにされた銅鐸の破片だったと考えられます。また、この破片の出土地が青銅器鋳造の工房区であることから、もう一度鋳直おすために原料として蓄えていたものでしょう。

小さな銅鐸片ですが、唐古・鍵遺跡で製作された銅鐸の一つが絵画を有する袈裟襷文銅鐸であることが判明しました。しかし、この銅鐸を鋳造した鋳型は、まだこの青銅器工房から見つかっていません。

このように鋳潰される前の銅鐸片も存在していることから、当時の銅鐸製作数は相当数あったことがうかがい知れます。

唐古・鍵考古学ミュージアム
【☎34・7100】
開館時間　午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
▼大人　200円（150円）
▼高校生・大学生　100円（50円）

ミュージアム上面図と展示位置